中山などの呂歌をうたひて其後に律にかへして青柳の歌をうたふなり【萬葉に日本琴と書り又是を東琴とも云】源氏若菜の上に奏賀の人々御はしに召てすぐれたる聲のかぎり出してかへりこゑになる夜のふけゆくまに物の玄らべどもなつかしくかはりて青柳あそび給ほどげにねぐらの鶯もおどろきぬべく云々さてまがね吹などの呂歌をうたひて青柳の律歌は後なれど【呂は春の調子律は秋のしらべなり】此集は四季のついでを始とする故に此青やぎの歌を上にえらべるなり

あうやぎをかたいとによりてうぐひすのぬふてふかさはうめの花がさ
小さ江ばりの青柳の歌なり心は春の鶯の笠にぬふてふ梅の花がさの下にいへり

顯昭本後京極の本には笠にぬふといふと有

眞がれふく青備の中山帶にせるほそ谷川の音のさやけさ
さいばらの呂歌なり是より下近江のや鏡の山をと云まで皆呂歌なりさて此歌は萬葉に大君の三笠の山の帶にせる細谷川の音のさやけさといふをすこしかへたるなり眞がね吹は鐵を劍にも鉾にも何にもつくるを云なり【ある人まがねは黄金を云よしにいへどこがねはやゝならの都の御時にみちのくよりはじめて出て神代より有しにあらず鐵こそさまゞ〳〵の物に作りて用ある物なればまがねとはいふなれ】青備の中山は備前と備中のなかに中山と云山あるよしなり帶にせるは其山のこしをめぐりて流るゝ川を云萬葉にみむろのや神の帶せるはつせ川とよめる如し細谷川はほそき谷川なり所の名にあらずこゝに注有て此歌は承和のおほんべのきびの國の歌といへり承和は仁明天皇の年號なりおほんべは大芽をはぶきていへり【大なめまつりの用度は二國に仰付られて其占にあへる國をもちたるなり】是は續日本後紀に此御代の天長十年十一月の大芽祭に主基の國備中悠紀は近江とあり此度の歌なるべしされど此注どもは例のとらぬ事此末に今上のおほんべの歌と云所に云べし

美作や久米のさら山さら〳〵にわが名はたてによろづ代までに
さいばらの呂歌なり歌はさら〳〵に幾世の末までも我名はたてじと云にて一二句は序なりくめのさら山は美作國久米郡にある山なり性靈集にみまさかの國さらの庄とある是なりさて注にこれは水尾の【水の尾のみかどはせいわてんわうなり】おほんべのみまさかの國の歌と有三代實錄に清和天皇貞觀元年十一月の大芽會の悠紀は三河主基は美作とみえたり

みのゝ國せきのふち川たえずして君につかへんよろづ代までに
藤川の流の絶ぬが如く萬代までも君につかへまつらんと云なり關の藤川は美濃國の不破の關にながるゝ川にて玄か云なるべし注にこれは元慶のおほんべのみのゝ歌とあり三代實錄によるに陽成天皇の元慶元年十一月大芽祭悠紀は美濃國席田郡【さいばらに「むしろ田のいつぬき川に住鶴の千とせをかねてあそびあへるかも」此歌は此度のにはあらぬか】主基は備中國都宇郡なり是にて見れば關の藤川は不破郡のせき川ならでむしろ田郡にもせきのふち川といふがある歟おぼつかなし

君が代はかぎりもあらじながはよのまさごのかずはよみつくすとも
是は序に我戀はよむともつきじありそ海のてふ歌をすこしかへてうたひ物とせしなり注に仁和のおほんべのいせの國の歌と有三代實錄に光孝天皇元慶八年十一月悠紀は伊勢國員辨郡主基は備前國和氣郡と見えたり此長濱はいせなり後撰にいせの國にまかりてかへりまうで來て誰ためにわが命を長濱のとよめり【みつね集齋宮の料の屏風の歌「長濱にゐてしほたるゝ時鳥さ月ばかりはあまにざりけり」これもいせなるべし續後拾遺賀部仁和の御時大芽會悠紀の方「いせの國風俗歌」いせの海の流を清みすむ鶴の千とせの聲を君にきかせん】

あふみのやかゝみの山をたてたればかれてぞみゆる君が千とせは
鏡山を鏡になしてよめる歌上に出つ鏡は臺を立てのする物なればたてたればといへり注に「是は今上のおほんべの近江の歌と有今の延喜のすめらみことは寛平九年七月に卽位し給へれば大芽祭も今年十一月有例なり且此比は悠紀の國は近江を用ふる例なれば其おほんべの風俗歌にぞ有つらん然ども此大歌所の御歌にも或は其よし玄るく或はよみ人の玄られたるも有べきをすべてはしの詞もよみ人もしるさずたゞ此卷の終なる歌のみ冬の加茂の祭の歌藤原の敏行の朝臣と詞をも作者をも玄るせるは此前の御代の歌なればなり今こゝの歌延喜の御代の始の歌とならば詞もよみ人も有べきを上と同じくはしの詞なければ凡其時の歌と思ひ合するのみなり此注どもすべて後のしわざなればこゝのおほんべの事はたがはずとも皆除くべし又此歌ぬしを今の本に大友の黑主と有も後のしわざなるへし是によみ人をあげば上の歌どもゝよみ人あるべくもし玄られぬはよみ人玄らずと書べきをすべて書ざるに是のみ書べきにあ

らずこれによりて此部の終の歌のほかはよみ人をも書あ
ず詞をもたゞかへし物の歌あづま歌などのたぐひばか
りと知るべし

東歌

あづまうたとよむなり是もうたひ物に用ひられし東の國々の歌どもなりさて東歌と有始は萬葉十四の卷に東歌と書て東の國々の歌をのせたり又二十の卷の始にも東の國々の歌有是らなりさては四方の國々の歌も有にたゞ東歌てふ名の有事ある人我國は日の神の御國にて東をたふとむ故か七道にて云時も東山東海をはじめとすればなるかといへど西歌北南の歌もありてこそ其前に東歌ともいふべけれひとり東歌のみあるからは其意にあらざるべし荷田の東麻ろの曰御國は西よりひらけつれば西の國々の歌は宮こぶりに異ならずひがしの國國はおそく從服たてまつりて人の心あらびたれば歌の詞も異ざまなるをもて萬葉集にあづま歌とて別に上たるなり今此集にえらべるは異ざまならねど東の國々の歌なれば萬えう云ふにならひてあづま歌と書し物と見ゆとなりさることわりとおぼゆ

みちのく歌

あぶくまに霧立わたりあけぬともせなをばやらじまてばすべなし
こは霧立て明ぬる夜もわかずあれかしさては夜のあけぬとも君がえゆかでとゞまらんすべなくて待し日來を思へばいかでとゞめばやとおもふ心よりよめるなり【今の本に霧立くもり君をばやらじとあり一本霧立わたり六帖にせなをばやらじと有をもちふ後撰に「あぶくまの霧とはなしによもすがら立わたりつゝ世をばふる哉」これは今をとりてよめるなりさらば立わたりの方をとるべきなり】それをたゞ霧立わたりとのみいひたるはいにしへのいひなしにておもしろし後には委しくことわりをたつるほどに心のちひさくせはしくなれるなり此ことわり今のみをまなぶ人はふとはえこゝろうまじきなり

あぶくま川顯注に土民は大わたりとぞ申なるといはれし川は亘理郡にある故しか云歟

君をやらじ六帖にせなをやらじと有をとるせなとはあづま言なるをもてなり

せなせこも宮びことなれど此頃は古言のあづまにのこりて都は時にうつり行なればせなとは今はあづま言なりと云を打聞のもらしたるものぞ

あぶくまはにごりてよむべし三代實錄に陸奥國阿福麻水神社延喜式にも安福麻河伯神社其外にもこゝを阿武久麻と書しもあればあぶくまと濁りてよむべしもしにごりてよむをきらふとならばあむくまとゝなふべしあうくまのごとくいひてはかなはず【後鳥羽院の御比より聞にくきをきらひてにごるべきをも多くすみてよむ故に其本をうしなふ事も少からずなれり】

みちのくはいづこはあれどしほがまのうらこぐ船のつなでかなしも

舟の綱手は舟をひく綱なり手して引物なれば手綱ともつな手ともいへり萬葉に網手綱ほせりとよめるにても知べしかなしもはいと〳〵めづる言なり子をうつくしむあまりにかなし子と云は身に云むばかりいとほしむなりすべてうれひにもおもしろきにも深きあまりをかなしといへり云ばつ山の歌にいへるごとく小舟など渚ちかく扮わたらんはことにけはひをまして身にしむばかり思はるゝを其浦こぐ舟ひとつにおふせて浦こぐ船の綱手かなしもとはめづるなり【萬えうに「ありそべにつきてこぐ蜑から人の濱を過ればこひしくあるなり」これしも船の行さまをもてそこのけはひをますなり今もさる所に行て見よ】みちのくはいづこはあれどゝいへる詞の類ひなくよろしき歌なりいづこを今の本にはいづくと有さる詞昔は見えずいづこと有しをうつしあやまれる成べしいづこ萬葉には何所と書ていづれの所と云義なりこゝかしこのこと云も所の義なるにて知べし

わがせこをみやこへやりて鹽がまのまかさがしまのまつぞこひしき

【萬えう「我せこをやまとへやるとさよ更てあかつき露にわかたちぬれし】鹽がま離が島右の同所なり彼國の女をとこを都へのぼしてひさしきほど戀てかへらんを待と云を島松の名によせたり今の本に都にと有は誤なりすべてかゝるは都へ大和へ北へなど云てにとはいはず是らも後の語によりて改し成べし

なぐろざきみつのこじまの人ならば都のつとにいざといはましを

【萬葉に「玉つしま見れどもあかずいかにしてつゝみもてゆかんみぬ人のため】をぐろ崎と云海邊に三つの小島在てえもいはずおもしろきたゝずまひなるを愛るにたへで此島が人ならばいざない行て都人に見せんものをとなりをぐろ崎のをは小初瀬などのをの如く上にそへて云なりさてくろ崎と云所物に見えず和名抄に栗原郡栗原ノ郷在そこの海べなどをくろ崎と云しにあらず

やいにしへはくろと云事をくりと云たり【いにしへの語に沖の石をおきついぐりといへり海中の石は色の黑きもの故いぐりとはいふ也】然ばくりざきを黑崎と書しを後にくろ崎とはよみしを玄られねば試にいふのみ

みさむらひみかきとまうせ宮木野のこの下つゆは雨にまされり

ある人是は國の守歟鎮守府將軍の狩などに出たる時よめるならんといへり寔に玄かるべしさて此野は木立おほくて下露の雨に增るを其供人の中より御侍御笠と申せといへり古歌のさまにておもしろし此野は宮城郡の宮城の郷に在べし上の戀歌に宮木の、木あらの木萩露をおもみともよみたり露ふかき所思ひやらる

しがみ川のぼれはくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

此川に稻つみたる舟の多くかよふを序にいひてさてあふ事を否と云にはあらず此月ばかりは待過せといひたるはさはる事の有てなるべし最上川今は出羽國最上郡にあれどいにしへはみちのくの內也しかばみちのく歌に入たるにや【續日本紀和銅五年十月割二陸奥國最上置賜二郡一隸出羽國一】されどはやくの和銅に出羽へつけていとひさしき事なるをこゝにしも玄か有は昔よりうたひ物の方に玄か云なれしまゝに載られけんかし稻舟

むかし年貢を稻にて納めしかば是を其國の御倉へ藏むる時多くの舟に積て此川をのぼせしをいへり【いにしへは年貢の租稅いく萬束などいひて稻をつかねしまゝにて納む出羽などの貢物は國の御倉にのみをさめて京へは奉らざりし也】且此のぼればくだるを一說は此川いとはやければのぼる船の玄ぞきくだるをいへるといへり萬葉に秋なの山にひこ舟の玄りひかすもよといふは我きらひてひけども人の退きがちにするをよめり【一說に早川にて舟の上りかねて人のかしらをふるさまにてはいなにはと云意にかけしと云はわろし】是に仍てこゝも川舟の退きがちにする如いなむにはあらずと上をたとへにおけるとも云べし又ある人は稻つみたる舟の多く上るも有くだるもあるさまを云なりといへり是を猶くはしくいはゞ稻をつみたるはのぼりそれを納めてかへるはくだるをのぼればくだるとよめる成べし右二說のうち上なるはすこしむづかし次の說よかるべし

きみをおきてあだし心を我もたばすへの松山浪もこえなん

末の松山も陸奥に在て海よりはや、遠く必波のこゆる事は有まじきなりよて君をばおきて他心をもたばかの海よりほど有高き山に浪もこえぬべしはたさる事はかけても有まじければ我あだし心も持まじき物に思へとなりすべてていにしへ人のたとへごとするは日本紀に新羅人のちかひに東の日西に入あれなれ川のさかさまにながるゝ時までかはらじと云る如く玄か有まじき事をもて云なり君をおきてとは君をのぞきてと云がごとしあだし心は他心なり【あだとは他と云意なる事上にいへり】末の松山後には末の山ともよみ又物語には末の松ともいへるはみな此うたより出たり海よりすこし程ありて見わたさるゝ故に末の山ともいひ松のたてれば松山といふにて末の松山と云一つの名にはあらざるべし【後の歌枕と云物に本中末の松とて三重に有と云はうけられぬ事なり】

さがみうた

こよろぎのいそ立ならし磯菜つむめざしぬらすなわさになれ涙

此磯べに出てわらはべ共の若和布などつむに打よする浪がぬらしそ奥の方にて波は打くだけよと云なりこよろぎの磯は相摸國の余綾郡の海邊なり萬葉にはよろきの磯ともよめりこゝにこよろきと云は黑崎をゝくろ崎初瀨をゝばつ瀨と云如くをの一言を上にそへし故に小余綾と書けんを小はことのみ云と思へる人のこよろぎとはとなへけり【上に小がめやいづらと云をこがめといひし所に委しくいへり】立ならしはふみたひらぐる事より出てふめど平らめがたき磯のさまを云なりめざしはわらはべを云兒のひたひ髮の末をそぎたるが目をさす如くおほひたるをもてめざしといひそれがたゞにわらはべの事となれるなりうなゐにてかぶろに髮の末をそぎたるうなゐこと云たぐひなり【顯注に「紀の國のなぐさの濱に貝ひろふあまのめざしのおとなゝりせば」狹衣に「めざしなるみぐしをせちにかきやりつゝむつれ給ふ」枕のさうしに「尼にそぎたるちごのめにかみのおほひかきはやらでかたぶきて物など見るいとうつくしかぐら歌「朝くらやをめのみなとにあびきする玉のめざしにあひきあひにけり】今も大磯の浦はたゞに此こよろぎの磯なるを立よりて見しに其磯海中へいと遠くさし出て汐の干たる時はそこの童らむれわたりてわかめなどつむなり昔も玄か有けんまゝに其わらべ等をぬらすなとよめるこそをかしけれいそ菜は萬葉に濱菜つむ蟹のをとめらともよみて磯におふるわかめなどの事なり沖にをれ浪は曾丹集によりこし波も沖にをれ

つゝとよめるによるべし波は物を折かへすやうに見ゆれば云なり磯にて浪の折る時はくだけたばしりて人立がたしよて沖にて折よと云なり

ひたちうた

つくばねのこのもかげはあれど君がみかげにまさる陰はなし

常陸の筑波郡に有ていと木茂き山なり此山の木陰世に玄げゝれど君が御惠みの陰にます陰はなしと君をほめていへり【つくばねは筑波の嶺也されど大きなる山をいふことなれりふじのね云々のねなどのたぐひなり萬葉につくばねのをてもこのもに又足がらのをてもこのもにをてはをちにかよへり】このもかのもは此面彼面にて萬葉に彼も此面もと云に同じさて此詞は筑波根にかぎると云は誤なり大井川の序に我らみじかき心このもかのもにまどひ後撰に山かせの吹のまに〳〵紅葉のこのもかのもちりぬべらなり源氏の夕顔さか木の卷等にもいへり

つくばねの嶺のもみぢ葉落つもりしるもしらぬもなべてかなしも

是は古歌なればいにしへを心得では説がたかるべしつくばねの嶺のとかさねて云ひさて彼山は木玄げゝれば木葉の落てなべて散しきたるに譬へてなべてかなしもと云なり此歌女の多くの人に戀らるゝ時見玄れる人は本より玄らぬもあはれと思ふよし有て玄るしらぬのわきなくうつくしまるゝとよめる成べしそれを此山の木葉の此面彼面になべて散つもりたるにたとへて上はいへりかくては頑なる人は心おほき女と思ふべし世の中の事は人にいはでさま〳〵思ふ事有物なり後の世の人心はそれをえらびて云べき人に物をいへどいにしへの人は心實にしてありのまゝをいへり今の人はことばと心と皆たがひてまことなし此わかちをよく玄らずば古歌はよく説得る事かたしかなしは上にも云ごとく心に思ひしめる事を云こゝにてめでたしともあはれともおもふをかなしと云なり

かひうた

かひがねなさやにし見しがけゝれなくよこなりくやるさやの中山

甲斐がねなさやにし見しがけゝれなくよこなりくやるさやの中山こは甲斐の國の人の都などへのぼる時遠江まで來て故郷の甲斐が嶺をかへり見るに今はさやの中山の隔てみえねば心なく隔つる哉とよめるなりかひがねは甲斐の國の高嶺なり

山國なれば高き山はいくらも有べけれどふじのねにまさる山もあらじさらば甲斐人は我國に跨がりたればふじのねを云にはあらぬか又他にも遠く望まるゝ山の有か

さやにもはさやかにもにて明らかなり見しかはかを濁りてよめば見てしがなと願ふなり【後の説に見しかとよみて見まじかの心也と云はわろし】仍てしを清みかをにごりてよむけゝれなくは心なくなり甲斐人は今も月の九日をけゝぬかといへば心をけゝれといひつらん萬葉の十四廿の卷なる東歌はかくざまに云る言語多し是のみを見てあやしむは物見ぬ人の心なり横折てやるは横折臥にてよこたをりふせるなりくやるは古言なり今の本にふせりと有はいにしへならず仍て改めつ【土佐日記にも東の方に山のよこをれるを見てといへり萬葉につき弓のたてり〳〵もあづさ弓くやり〳〵も】

ふせるとはいにしへならず仍てくやるに改めつとはいかに萬葉にふせりともふすともよめるがあまたみゆ鹿じものいはひふせらめはゝひ臥るなり又あたゝらのねにふす玄ゝのなどをおもはざるはよからず仍てこゝは改めずしてよこをりふせるとよむべしこは打ぎゝのあやまり歟

かひがれなれごし山ごし吹風な人にもがもやことづてやらん

是は右と異にて都方の人の甲斐にくだり居て都戀しきまゝにそこなる高嶺を吹こす風が人にもあれかしさらば其我故郷にことづてやらんとなり故郷のおばつかなさに問やらん便さへなき時いとせめてよめるなり嶺こし山こしは甲斐が嶺を吹こすをかさね云のみ人にもがもやは常にもがもやなどいひて願ふなり後にはがなといへりことづては言を傳ふるなり

いせ歌

おふの浦にかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはん

人の婚儀に或不レ成の事令の御さだめにも有て其よめとりの事の成定るをなると云なりこれはまだ定かに成さだまらざるさきにたがひに心をかよはせる中なれば父はゝのゆるしてなりならずともみそかにねてかたらんとなりそれを梨の木の子のなるによせて上はいへりかくて此浦には片方に向て枝の生たる梨の木有けんを見てよめる成べしおふの浦と云所の名伊勢志摩の二國の内に此歌の外によみたるも見えず又物にも見あたらず伊勢の多氣郡に麻績の郷ありもし此をみをおふにとなへあやまりしものか又萬葉に嗚呼兒浦と云は志摩ノ國英虞の浦也今の本に是を嗚呼見と書誤りてあみの浦

とよめる如くこゝもあごをあふにあやまりしも考られず志摩はいにしへ伊勢の國内なるを割て一國とせられしもの此歌はまだ二國にわからざりしいにしへによめる故いせうたとしてうたひしものか【もがみ川をみちのくうたとしてうたふ例も有なり】

冬の賀茂のまつりうた　藤原のとしゆきの朝臣

此祭は宇多天皇まだ王侍從と聞えおはせし時かも山の邊に狩し給へり俄に空くもり霧立て道まどひ給ひ林の中におはしましけるに翁來りて申さく我は此ほとりの翁なり春は祭あれども冬に祭なしねがはくは冬の祭を賜はらんと王侍從の御心にこはかもの皇神ならんとおぼして我ちからの及べるにあらず内に申さるべしとのたまへれば翁我其力のおよばん事を考りぬねがはくはみづからかろんじ給ふ事なかれといひて見えず成ぬ其後いくほどもなくて御位につき給ふこゝにして神の御ことばを思し出て寛平元年十一月廿一日に加茂の臨時の祭をはじめ給ひ左近中將藤原〻の時平朝臣を御使として藤原敏行にあづまあそびの歌をよませたまへり此事寛平の御紀に見えたりさて十一月下の未の日試樂ありて下の酉の日に此祭あり此大歌所の御歌にはすべて名をあげぬを是のみによみ人を書せしは此前の御代の事にて明らかにによみ人の考られたればあげたるなり

ちはやぶる賀茂の社のひめ小松よろづ世ふとも色はかはらじ

顯昭本にはかもの祭のとあり後京極殿の本といふにはしかあるなり

歌はいさゝかもかくれたる事なく且とゞこほりたる所なくことばは聞かなる玉をみるが如し此卷の終におかるべき歌なり其うへ今上の御父みかどの神の御告にて始たまへる祭の歌にて限りなき御よろこびの事なれば此卷のとぢめにせらるゝなりちはやぶるはたゞに神を崇むる詞とこの比はなれる成べし【萬葉にちはやぶるかねのみ崎とよむはそこの崎は波いとかしこければおそれみていふなり猶冠辭考にいへり】さるは加茂の大神をかしこみていへるなりと見るべし姫小松は女松を云といへり土佐日記に墨の江にて岸の姫松といひ又忠見集にも子の日のひめこ松とよみたり然ばこゝも其たぐひなるべし萬葉に小松はよめど姫小松と云歌なし此頃よりの事にやこれにはうたがひなきにあらず

家々稱二證本一之本乍二書入一以レ墨滅歌今別書レ之

是は上にもいへる如く卷々の中に此左の歌こゝかしこの本に有しを後に此集に入まじき歌なりといふ事を傳へ聞て其本には書入ながら墨もてけして有しをそれを定家卿の拔出して今こゝに別に書あつめたりと云なり證本とは家々にて此本こそ證據とすべき本ぞと云てたふとめる本をいへり今思ふに其證本と云も區々の誤ども多かりしなりさて其けちたるが誤なりとみゆるも有寛にけすべきも有柚人はと云よりけふ人をこふる心はと云までの六首はけすまじき歌どもなり是らは其所々に書入べし又わぎも子にあふ坂山と云より道考らばつみにもゆかんと云までの五首は寛にけちさるべきものなり其わかち次々に云

卷第十

ひぐらし　つらゆき

そま人ほみやぎひぐらし足引の山のやまびとよびとよむなり

在二郭公下空蟬上二

柚人は材木をとる山をそま山といひ其とる人を柚人と云宮木とは大宮を造る料の木と云事なりこゝは山より引おろすさまを云仍て山びこのおびたゞしくよびとゞろくは宮木を引おろすならんといひて二の句にかくしたり此歌何のさはり有てけさんや【此歌事なければこそふたゝび拾遺集に入たれ末の句聲とよむなりとありいづれにても聞ゆ】

勝臣

かけりてもなにかたまのさてもみんからほほのほとなりにしものを

をかだまの木友則の下

此歌上の物の名の部にすでにいへり

僧尼令集解に五辛の下興渠者呉母也といへれば五辛の中の興渠なるもくれのおもと云名のよしも考らるれど今いづれの草を云とも考る人なし又和名抄に懐香一名懐芸和名くれのおもとあれば其かたの委しき人に尋ねしに懐芸はいとくさき物なれど韭の屬にあらずといへり彼五辛の四つは大びる小韭淺葱の類なるを此一つ別なる物を加へん事おぼつかなし思ふに此よつの外にも猶其たぐひのくさき物多し其中の物なるべし【五辛はから國にても道家と釋氏のたがひにて物ことなるよしなり】

僧尼令の集解には五辛者一曰大蒜二曰茎葱三曰慈葱四曰蘭葱五曰興渠也と見えて呉母也の注なし一本にはある歟

こし時と戀つゝなれば夕暮のおもかげにのみ見えわたるかな

忍草ノ上利貞の下

物は四五句にかくせりこよひおもふ人のこし時戀つゝなれば俤にのみ見えて其人は來ざるよしなり夕暮のとおけるは忍び夫は夕暮待てくる物なればなりかつ其ゆふぐれにこし時の俤も今夕暮を待てしをるにみゆる俤とをおもひ合せていふ此處すこしむづかしけれどかくし詞には是ばかりの事はあるべし

おきの井　みやこじま

此うたおきの井はかくれて都島はかくれたりともなし思ふに此集もとはおきの井と有てみやこ島はなかりしをいせ物語に此歌をとりて沖の井都じまと云所にて酒のませてと有を見て彼物がたりは是より古き物とおもひあやまれる人こゝにさからして都島をも書入たるものか

なのゝこまち

おさのぬて身をやくよりもかなしきはみやこしまべのわかれなりけり

からこと清行ノ下

物は初の句にかくせりおきは炭火のおこりたるをつゞめておきといへりさて身におき火の居て燒よりも思ふ子の別はかなしきとなり都島は所を云新撰萬葉「人をおもふ心のおきは身をぞやく煙たつとは見えぬ物から」此歌をけしたるを思ふに伊勢物語に見れば業平と小町と夫婦に成て陸奥に在しにゝたり其實を尋ぬるにさる事なければかへりて此集に此歌有べからずとてけしたるにも有べしいせ物語にある事を作りごとも云らぬ人やゝもすればかれと此集とをてらしあはせて此集を誤る事多し此歌けすべきことわりなし

そめどのあはだ　あやもち

染殿ノ院【そめ殿は忠仁公の山莊なりし事元慶三年の紀にみゆ】はゝじめ忠仁公の家なりしを清和天皇後に外宮とせられて貞觀十八年に御位下居させ給はんとて此殿へ行幸有て此宮におはせし事三代實錄に見ゆ所は正親町の北京極の西二町と拾芥抄にいへり粟田は三條より相坂山の方へ出る所なり【六帖「あはだ山こゆともこゆとおもへどもなほあふ坂はゝるけかりけり】

うきめなばよそめとのみぞのがれゆく雲のあはだつ山のふもとに

桂の宮の下

物は二の句四の句にかくせり是世をのがれて山住せんとてゆく心によめり雲の淡だつとは雲のあは〳〵しく浮たつを云【水の沫にはあわと書淡々しきにはあはと書昔のかなの正しきによめることばにあやまれるはなし】水海は汐海にむかへて水の淡々しければ淡路といへり雲のあは〳〵しとてかくいへる也かつ淡と粟田の假名よくかなへりこゝの注に「此歌水の尾のみかどの染どのより粟田へうつりたまふける時によめると有是三代實錄に元慶三年五月四日太上天皇清和天皇おりゐたまへるを申す清和院より染殿院と清和院と同所といへり粟田院へうつり給ふと云事をもて云なり此天皇は御世のあひだより太上と申すまでもいとさかえさせたまひぬるを何故にか、る歌あらむや事の義は玄ちで唯ふと右の御事有を見て注せしなりただ其二の詞をよみ入んとてかくよめるにて歌は粟田山の心にあらずいづこても雲たち深き山の意なりさては此歌も何のさはれる事有てけちさるべき若右の注によりて上皇述懷の事とおもひて除きしにやさらばいふにもたらぬ事なり

卷第十一

奥山の菅の葉しのぎふる雪の下

けふ人をこふる心は大井川ながるゝ水におとらざりけり

戀る心はおほしと云かけて且其流る、水の如く心に思ひたぎりてくるしきよしなりさて此歌をけしたるは何事ぞ此上なるおく山の菅の葉しのぎと云こそ萬葉の歌なれば再撰のよしにてのぞきもせめ然其又考ふるにおく山の菅のはと云歌の上は春夏秋冬の戀の歌を次で、えらびたる終に此歌入べくもあらず思ふに他の部に入しが亂てこゝに入たればたくひせずとてけしたる歟若此卷のなかばの蘆島のさわぐ入江の玄ら波の歌の下などにや入てありけん

わぎもこにあふさか山のふもとのすゝきほにはいでずもこひわたるかな

是よりは皆けすべきなり いかにぞなれば先づ此歌は萬葉十一に「吾妹子に相坂山の皮爲酢寸穂には咲出ず戀わたるかも」と有をよみ誤まれるのみ且萬葉の歌なれば此集に入まじき事上にいへるが如しはたすゝきは幡薄旗薄とも書てはたと云事玄るし【はたすゝきは旗の手のごとくに物には玄るしつれど又思ふに皮と書外にもさま〳〵よしありてはたすゝきとよみてはだへにほをふくむものなれば云かともおぼゆ此二つのあひだはもれじ】さるをこゝに玄のすゝきとて一種穂に出ぬがありと云は誤なり萬葉にふるの早田の穂には出ずと云も穂に出る物をもていひくだす例なるを心得ぬ人の

說也又「秋芋の花野の薄穂には出ず我戀わたるこもり妻かも」などしのすゝきにてもかくいへり其外にも有也薄の玄のと云は玄なぶ物なれば云すべて玄のとはしなべるをはぶきて云事と知べし後撰に「あふ事はいざほにでなん玄のすゝきしのびはつべき物ならなくに」此外拾遺にも此體によみたる有金葉集に「今はしも穂に出ぬらん東路のいはたの小野の玄のゝをすゝき」是は古きさまによみたるに穂は出ぬらんといへりさるは玄の薄をおもひあやまれるはそれより後の事なり

卷第十三　こひしくば下に思へ紫の下

いぬがみのとこの山なるいさや川いざとこたへよ我名もらすな

こは萬葉に「狗上之鳥籠山爾有不知也河不知二五寸許寸余名告奈」と有をよみあやまれる也今思に古物語に此歌の末を我名もらすなどかへてあめのみかどの采女にたまはれる歌としたりけんを本を正す人なき代々なれば六帖を始て源氏物語枕の草子にも誤りていひけんかしさていざとをきこす我名のらんなどは女の歌にていにしへ父母のよぶなるむすめの名をば夫とする男にのみ名告る例也其夫は妻の名をよぶ事なれば也さるを此をとこはまだ忍びかよふほど故に女の名を玄らずてあればいつまでぞこの名を知らでやはと聞えけるから今は我名を告なんと云にてうち〳〵夫婦の契するなり【萬葉に此歌の類多し「みさごゐるありそにおふるなのりその我名はのらせおやはしるとも」是はまだしのべる中ながらすでに名はゆるしたればよしや父母の聞てせむるともと云也又「たらちねのはゝがよぶ名をのらめども道ゆき人を誰としりてか」又「しかの蠣の磯に刈ほすなのりその名はのりてしをいかであひがたき」此ほかにも吾を夫として名をのれとよめる歌卽第一の卷の雄略の大御歌よりしていと多し】犬上は近江の犬上郡なり天武紀に犬上河と有は卽此いさや川の事かさて上はいざとをきこすといはん序なりいざは否と云に同意にてこゝは女の名を不知と云事なりきこすは男のたまふと云意なり言語は聞て知る物なれば物云を物聞ゆるとも云なりいざとをのをは助辭のみ名のらんは名を告んなりいにしへ人に物云事をもはらのるといへり詔命をみことのりと云にて知べしさて萬葉の十一十二の卷は其代にての古歌集と云にて作者のしられぬ歌どもなり然にあめのみかどゝ云は何事ともなくてとるにたらぬ說也【みかどゝいひて天皇の御事とするは後のことばにていにしへにはいはず】玄ひて天智天皇なり聖武てんわうなりなど云は笑ふにたへぬるぞ

山しなの音羽の瀧のおとにだに人のしるべく我こひめやし

これは上に音羽の山のと有を瀧とかへたるのみにてまたく同歌なればけしさるべしかくざまに古歌を少かへて物語を作れる事伊勢物語の古意に委しくいへるが如く是も古き物がたりなりけん事上にいへるなり采女の返しに奉れると云はもとよりあらぬ事なりかつ采女とのみにて何がしの采女ともなきは是も笑ふにたへぬるなり

卷第十四　おもふてふことのはのみや秋をへての下

そとほりひめの。ひとりぬて。みかどをこひたてまつりて。

わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひこよひしるしも

是は日本紀の允恭の御時天皇衣通姫を藤原の宮に住せ給ひてたま〳〵行幸有て姫のおはすやうをうかゞひませるをばしらで御歌よませ給へる其歌「和餓勢胡我勾倍枳豫曽奈利佐瑳餓泥能區茂能於廬奈比廬豫比辭流辭母」と有てこゝにいへるはよみたがへしなりさゝがねとあれど古言にはかにとかねと常にかよはしていふここは篠蟹なり蜘は蟹のかたちしたれば是は水ならで篠原にすむ蟹の心にていへる蛛の一名也【くもは笹にのみもすまねど物一つをもていふはいにしへの常なり】

ある人云さゝがねの蛛とはかのさす竹の君とつゞけたるに同じく蛛の冠言にてさゝ原にすむ蟹と云事にはあらじと是もいはれたり一說にして用ふべしさす竹の君は冠辭考にくはしくいはれてあさしの竹のこもりと云をつゞめてさす竹のきみといひしなりとさらばこゝもさゝがねのこもりをくもとつゞめかつかよはせていへるかとなり

さて蛛は衣にかゝる時必おもふ人よき人などのくる前祥なりといふ事今もいひからぶみにもみゆれば上古の諺にてしかよみ給へるなりおこなひ其なすわざを云ここは蛛の糸を引を云なり後にふるまひとなほせしも心はかはらぬど本語にあらずしるしものしもは助語なりさて眞字序に小野小町の歌古衣通姫之流也といへる事何のよしもなし衣通姫の歌日本紀にたゞ二首のみ有て流をたつるほどの例見えたる物なし然るに此事を後よりかな序にまで書くはへて此歌をも集に書入しものなりされど序に萬葉に入ぬ古歌をとれるとは萬葉より後の古歌なる事既にいへるがごとくなるに日本紀などの

ことにふるきをえらびとらるべきにあらねばけしたるなり此集とかくに中比の世より事好むもの、さまぐ〳〵とみだらせし事上にも所々云が如しよくいにしへをしる人心して見たまへ後のこゝろを少にても交ふべからず

深養父戀しとはたがなづけゝんことならんの下

つらゆき

みちしらばつみにもゆかんすみのえのきしにおふてふこひわすれぐさ

是は萬葉に「いとまあれは拾ひにゆかん住の江の岸によるてふ戀わすれ貝」と云を忘草にかへかつことばも少づゝかへしのみにてまたく同歌なり貫之のかゝる事せらるべきにあらずかつ歌も彼人のよみ口にあらず仍てけしたるはよしこれらもても後の人の書加へし事此集にあまたなる事をしらるゝをよくもよみ見ぬ人のみだりにたふとめるはおろかなる事なり

此歌此まゝにて紀氏の新撰にのせられたるはいぶかしき事なり

麻呂聞く賀茂眞淵の翁常に謂らく萬葉集はますら雄ふりして古今歌集はたをやめの姿たりとこはいその神ふることの葉を學びえし人のこゝろなるをのちせ山後の代をのみおしたとめる人の耳あらたむるかたり草なりけり難波津あさか山のはしめに入たちし心は頭の霜ふりゆく齢までもとき磐かきはのかはらふ時なきなむ大かたの人のならひなりけるさるは歌玄のひおもひたてるにはまづ延喜のいにしへの玄らべのたかきよりして和藝へのかさしの實さへ花さへと、のへるにもとづければいつしか月草のうつしなさでや有べき玄かして檜の葉の林にわけ入つがの木のつきくなる文らをもよみわたさばますら雄手弱女のけぢめをも淺茅原つばらにこゝろえつゝけづり花のまことならぬ色にはめとどむべからずこそそれかたへせむは翁がをしへをかしこめりしこの打聽にしくものもあらじをいたづらにひめをかじとてまめこゝろする人をたすけなせしは三津の秋をぬしのつとめなりけり麻呂とは友垣のへだてなきものからよろこびにたへで野べのにひ草玄づかなることをしりへにつきて申侍る

春の梅津の里人橘の經見

古今和歌集卷第二十打聽終

三代集總說

いにしへの事はおくが玄られぬ山の如しこれに入りなんとする時はまづふもとの川にみそぎし山口の大神をまつり百たらず八十まがつこゝろをはきやらひ神なほびのなほきこゝろをもているべし玄かる時は道のまけにあふ事なく五百霧にまどはずたはやすく戸山しき山をすぎておく山まさか山にのぼりなんしかのぼりてかへりみん時にこそひき、山深き谷のくま〳〵國のまほらをもつばらにみあきらめなばこゝろのちりはじめてすが〳〵しかりなんしかるを後の世の人はその山口のすめ神をまつらずまがつ日といふ神に相ぐしたりかみつ世の事をまねぶはふかき山に入るがごとしかれそのはじめをみだりにする時はしき山のみ霧にまどひ坂道の苔にあひて遂に高きに到りがたし落瀧つきよき川瀬にみそぎしあし引の山口をいはひていさゝけもまがつ事に目まじ口まじせず神なほびのなほきこゝろをこゝろとして問放見放行ときは天雲ゆ上なるおく山まさか山のみねにたはやすくいたりなんかくいたりてかへりみば山のそき海のそき國のまほらをもみあきらめつゝひとり萬づのことをもおもひあきらめたりなんそも〳〵後の世には此百くさのことの葉の林にうなゐ子どもをはなちあそばせてものゝうひまなびさする事となりにきさればその山口をまさしくいはひもていにしへのなほきにせばやとてこれをしもことわりぬしかはあれどよれらんことは人のまち〳〵以下闕

今是を注せるに私をいはずおしはかりをなさずものにかゝはらずあることをかくさずたゞふるき據をあげたり

三代集總說草稿

古今集附傳受の說

古今集はいりたちてえらみつとみえて大かたよろしそが中にも又すぐれたるをばぬきいでたり外にもあれど或は巧みに過きあるはゑらべいまだしきをばおきぬおほくはよみ人しらずてふにすぐれたる歌ありこのえらみのころの人たちのにもよきはあれどおのづから世くだちてかたのわざとなりしかばみなつくれるものゆゑによくみればことかたくなしきなりいにしへ人のをりにつけたる事をおのづからいへるがよきはことなる是より末五行むし入て一向みえず

古今傳受

古今傳受といふ事藤原基俊堀河の院の頃人紀貫之の女の傳書としてその門人に傳へしよりはじまれりといふ事むかし古今傳受の本をみしにありしなりその事據もなく其傳といふ事ども皆とるにたらぬ事どもなりしかばその書惣て書きとめもはべらず只そらにおぼえしのみなり其後俊成卿の書し物といふ傳受の事か見ゆえず定家卿の書きし物に顯注密勘といふ物に有しか古今は受てこそよめといふ言のありしかば定家はその傳を尋て守られしなるべしゑかしながら顯注密勘の說かならず其傳にのみよりしとはみえず自の見を立たり其顯注といふは顯昭古今秘注といふ物三卷はべりその注をむかしみしに執長卿一條三條などの御時かの古今注といふ物有しにそれをかれこれ取捨て自の意をも書しなりこれをおもへば顯昭は基俊の子にて其傳あらば顯昭もよるべきにかの秘注に基俊の傳の事はなきやうにおぼえはべりよしありとも其傳よろしからねばこそかの執長卿の說を專ら擧て自已の說をつひたり其顯昭の注も凡とるべきものはいとすくなかりし也　かくて定家卿も古今は受てこそよめとはいはれしかど別に傳受の書きしもの有やなしや凡てよにはきこえず只後の世古今傳といふ應永の頃後小松院稱光御二代の年號東下野守法名常緣といふ人其頃古今傳をしりたりとて丹波やらんの城にこもりて戰ありし時勅使立て軍中に其傳を奉らせられしといふ事後の傳本に專ら申せり是實に定家のうけたりし傳にや知がたし宗祇といふ法師は此下野守の門弟にて同じく古今傳を得しとて古今宗祇抄といふ物二卷ばかりありし其說みな佛意にいひなしたるなりこれをおもふに古今傳といふ事の基俊の頃にいさゝかいひ染しを俊成定家に至て自已の密勘を書れしにやあらんされどもいさゝか大きになしゑは

かの東常緣或は宗祇などの言ひ廣めしにてぞ侍りける右の書ども總じて信じ侍らざりしかばおのれ覺えはべりしとき一わたり見しこともはべりし一書もたくはへ侍らずまして老いはべりて忘れがちなればおぼつかなくはべれど凡の事覺えはべるを記して奉る也

三鳥

三鳥　三木　三草の傳といふ事あり其委の傳言は忘れはべりその中に

百千鳥は「百千どりさへづるはるは」といへる百千鳥は鶯をいふといへり「百囀流鶯」といふ唐人の詩によりていひしなるべし顯昭の注には萬葉集六云「吾門の榎實もりはむ百千鳥千鳥はくれど君ぞ來まさぬ」てふ歌などを引て鶯にあらずといひしを定家の密勘に非鶯とも難一決又不可限鶯百鳥といふ一つ先鶯か百花柳櫻をのぞくべからずと書しを契冲いはく定家卿のたまひしもつきがたし百花といふ中に柳櫻をのぞかずとて柳櫻をさして百花とはいはねば百千鳥の中に鶯ありとて鶯をさして百千鳥といはん事いかにと樣に書しはさる事と覺えはべりお私もふに凡春は常ならぬ鳥どもゝさへづれば百千鳥さへづるといへるのみなり萬葉五に「うめの花今さかりなり百鳥のこゑのこひしき春きたるらし」巻六に長歌「さく花のいろめづらしく百鳥の音なつかしき云々」又巻六に「吾門に千鳥しばなくおきよ〳〵我一夜づま人にしらるな」とあれば右の理りもまたくたゝ百千鳥と聞え侍りかの榎のみは秋の末に熟すればかの百千鳥の實をはむは秋なり

喚子鳥

古今集に「遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな」といふ一首によりよぶこ鳥とは猿といふは三聲叫ィ卽人の腸を斷などから文によれるにや巫峽かなどの山中の詩なればなり此外の說は覺え侍らずかの東野州傳の切紙といふ物に是はかつほふ〳〵と鳴鳥のことなりとせしはさる事なりしかるにさるといふ說は野州はとらぬなり私考るに萬葉に喚子鳥をよめる歌多きそが中に專らは夏のうたに有しさて萬葉八に坂上郎女「よの常に聞はくるしきよぶこ鳥音なつかしき時にはありぬ右一首天平四年三月一日佐保宅作」といふ注ありまことにかつほう鳥暮春より中夏の頃まで深き木間にかくれてなくはほとゝぎすよりもあはれなるものなり且萬葉に容鳥貌鳥と書しもともに同鳥の事にて人を喚がごとく

きゝてよぶこ鳥といひかほう〳〵となく聲によりてはかほ鳥といふ事諸鳥の名にもさま〴〵いへる類ある也

稲負瀬鳥

是は顯昭云和名抄序に山鳥有山鳥稲負名といへるは山鶏にはあらざるか所詮稲負鳥といふ物のはべるか本書に其名字不入鳥の我朝に其名いひつたへて文字なき其數有かといへり審勘にいなおほせ鳥先人の說是におなじ愚意今按ずるに猶庭たゝきとおもひはべれど無差證同清輔朝臣云々是ほぞ袋草紙かさて東野州已來の說にかのとつぎをしへ鳥といふをもつて淫名負鳥てふことゝいふインな字音に名な訓にいふはいと下々の音にこそあれこれらはよしなし私に考るに審勘の說のごとく事の樣黃せきれいの事とおぼし他に證は侍らねど此「我門にいなおほせ鳥の鳴なべになべは萬葉に共といふ字をも訓て二つ物をならべいふ時にいふ言なれば並の意なり今朝吹風に鴈はきにけり」てふ歌秋の末つ方風寒くなれる比に鴈も專ら來りその比ぞにはくなぶりもかならずきたるなりしかれば此二つをとり合せて秋ふかき頃のさまをよめる古歌なるによりてたしかにいなおほせ鳥鶺鴒の事と覺えはべり

頭書曰　或說に公實は馬といひ家隆は鵜といふ後注に月令云季春之月田家化爲鴽一名鵜母これら皆我朝の事をわすれしものなり

又頭書曰鴈は中秋より來れど專らは暮秋に來るゆゑに萬葉に風寒きなべに鴈の來鳴と多くよめり

又頭書曰「鶺鴒に二つあり脊少し青く腹黃なるは庭門畑などにきて尾をふりてありくなり又形は全く同じく鳥に黑まだらなる文有は水邊にゐるめり此うたなるは上にいふ鳥なり

三草

三草は　めど　かはなぐさ　くれのおも

集の物名　めどにけづり花させりけるを「花の木にあらざらめどもさきにけり」とかくしたり是を馬道にけづり花させりけるといふ說又の說は忘れたり餘材抄に奥儀抄著といふ草をかひあつめてそれにけづり花をさすやうにいへり或抄に一條禪御說古今三種の秘事の中にめどにけづり花さすといふ事有說々不同家々所存各別なり定家卿所用るめどゝいふ草あり其草につくり花したるといへりこの趣を用べきなり家說佛名などの時著に作花をして花がめにさゝるゝ事なり著は帶木といふものなり極く枝しげきものなり或說に「初春の初子のけふの玉はゞきといふ歌めどをば玉はゞきといふ私考るにことなる事おもひえはべらず先かの著に作花をつけし物とするのみさてけづり花とは後につくり花てふにおなじき事餘材抄に古きふみども多くひけりかはな

東野州秘傳には內侍所の鏡函をひらきてみたるより具無草といふといへりこれはとかくに三種の神器によせんとするなり定家は河骨といふ物なりといひ榮雅抄には河に生る苦なり河菜草と書菁女ともいふと云餘材抄に和名抄の水苦一名河苦和名加波奈といふをもて或は祝詞の鎭火祭に水神匏川菜埴山姫四種物云々と有を引ていへり是は據多し今も水苦といひて水邊に生る苦に水をくれのおも

今墨けしにいりて本文に除きしはひが事なり

この事さま〴〵にいひしかど忘れてはべり和名抄に懷香一名懷苦和名久禮乃於毛と書け私考るに僧尼令に出たる佛家の五辛の末に興渠といふ物は同令集解に興渠は具母なりと注せりしかれば此事かとはべれどいかなるものかしれがたしおもふに五辛は大韭小韭などの類もて四種までは書しを五の一種のみ異物にはあらじかし韭冬葱（ナビキ）島葱（アサツキ）の類なるべしよつておもふに今薩摩よりきたるラッキョをいふにや

三木

をがたまの木

是を傳受の說には御賀玉木とてかの眞さかきに玉をかけたる形にして天皇を祝奉るものなどいふはよしもなき事なりこゝは木の篇にてたち花狹をか玉の木山柿の木とつゞきたれば岡玉の木といふにて玉槲といふにおなじとみゆ榮雅抄といふ物いとひがことのみ多き中に此所に「玉がしはをがたまの木の鏡葉に神のひもろぎそなへつる哉」てふうたを引たり此うた凡延喜などの頃かそれよりも上にはありとも末にはあらじさて玉がしはをか玉の木といひかゞみはといふも古記其外に饌膳の槲葉をいひしかば神のひもろぎそなへつるといふなどまでかしはの事と聞ゆ木に田舍にて藪玉の木といふ有是は葉は肉桂に似て南天燭ほどの赤き玉の如き子の枝の末ごとに聚てなりぬ是に對るに山岡にある玉の木なれば岡玉の木と云て槲の類の物なる事明らかなり

頭書　本は此「みよしの、よしの、瀧にうかみ出るあわをかだまのきゆとみつらん」といふにならべて「か

けりても何をか玉のきてもみんからはほのほと成にしものを」てふうたも入しをかの御賀玉といふ説を立ては此歌甚凶なれば墨にてけしつるなりそれを後の世は末に墨滅のうたとて別に書り皆私より本書をみだせる物なり

此外二木は何にかありけん忘れ侍り右の傳をみしは廿歳ばかりの時の事也其後五十餘年をへてことに近年ふつにおぼえなく候へば也その名ばかりも御おぼえ候はばかさねて玄るして給はせかし

橙は

あへ橘にあらずと申私考先年奉りしよし仰下され候へばいろ〳〵求候へども見えはべらず又其考もふかき考の侍らばいさゝかはおぼえもをるべきにさる事の分ちさだかには覺え候はずさきに今他のものにかつ〳〵玄るしおきつるをみ侍れば字書に「字彙柚似橙酢皮苦橙皮甘又小者爲橘大爲柚花白子黄橘柚二樹相似非橙也」といへり萬葉十九卷越中風土記「希有橙橘」和名抄に「橙安倍太知波奈似柚而小者也」又右に皮苦橙皮甘といへり今似柚たる物多けれども其皮ども多は或は苦或は辛し密柑と金柑のみ皮甘といふべし是にうましものなへたち花といひ和名に橙をあへたち花といへるを合せおもへば橙とは今の密柑の事にやはべらんさて右の字書に「小者爲橘又橘柚二樹相似非橙也」といひ萬葉に橙柚希とつゞけ書しも其類に候して橘とは別なるべくされど橙はあへたち花にあらじといふ事は冠辭考うましものの條にあへたち花は聖武天皇の勅に橘は菓子長上にとのたまひしをおもへば當の橘を甘きものとせし故にいふにて橙にはあらじやと書侍りし是もさだかならぬ説にて私にも猶有べくはおぼえはべる也

或人云橙は今はだい〳〵をいひ又九年母の類といひしは皆よしなし

後撰和歌集説

こは順望城などの五人に仰ありて撰ばせらるゝてふ事後撰奉行文なども有てさだかなりしかるをこの集をみれば えらめる物とはなしいかにぞなれば先後撰とは古今集の後撰の意なるをすでに古今にいりし歌をも入たり又萬葉の歌を語をも事をもよみ人をもあやまりて入し歌おほしそれのみかは同じ後撰の上にのせたる歌を下にまたさへのせたりかゝる事はいかなるものゝ書る文にもある事かはしからばかの仰はありつれど一わたりとりあつめしのみにて二たびゝらきてだに見ずてやみにし物なりけりげにもその書集めたる歌にすぐれたりとみゆるはいともいとも少しにてかならず撰みに入まじき歌のみこそおほけれはた此御時には歌よくよむ人もむかしのふみよくみたる人もなくてたゞから文の事をのみたれも〳〵まなびしなればかゝる仰ごと承る五人はた皇ら御國の事もこゝろもうたのさまをも玄らねど時につけて聞えあるのみなりければいかでかよろしからん

後撰集にはよきうたいと〳〵少したゞくちさきらのかしこげなるのみこそあれ書つめしまゝに傳れる事は明らかなれどその打あつめんにはとる人のさるべきがあらねばふとよしあしわからざりし成けりいかにといふにたとひ同し貫之の歌といへどをりふしに叶ふばかりに時につけたるおくりこたへその外こゝろも打よみたるにはいと口さきらばかりにてこゝろひくき玄らべわろきこそあれ中に延喜の御時うためしけるに奉るなど有時のうたをみよたとひ歌はさして勝れざるもそはかならず玄らべたかく心みやびたるどもなりこれをもつて貫之などのこゝろにこひおもふこゝろ詞をしるべしその外うちよみたるはよきはすくなきなりこのうためしける時の歌をもて同じ人の歌も他歌をみる時よしあしはわかるべし古今歌集にては他もよきが中なればめし給ふ歌とてもわかずきこゆるを此後撰のおほくはことひくきが中にてはいとこそけぢめみゆめれこをもつて貫之などの心をよく玄らばそのかみの人たちのこゝろを次て〳〵におもひのぼりてしるべしさてよきうたをばぬきたり

拾遺和歌集説

こは拾遺といへるは古今後撰にのこれるをひろふ意なりしかるに古今後撰に既に入たる歌あまたのせて玄かも誤れるこそおほけれ萬葉のうたは古今集序にのぞきたりといひそれにつゞきて古今集は撰みしよしなればその古今集の拾遺に萬葉歌をとるべきことわりもなきにしかもいとあまたこそとりたれその萬葉の入たるをくはしくみるに百の中に一つ二つならではまたく萬葉なるはなく專らはよみあやまり又たま〳〵はなほして時の語にかなへて入たりとみゆるもありそれに甚しきは人まろならぬ歌を人まろとて入たるおほく且玄らぎへの御使のよみし歌を人まろのもろこしにてよみし歌とかきなどせしその外も

萬葉の歌を誤りしもの數へがたしそれしも有に是にも既に入たる歌を六首ばかり又末に入たり是こそあるべきわざかはしかるを是は花山上皇の御撰又公任卿の撰ぞなどいふ說はべりいで上皇の御撰ならば仕る人々におほせ有て古書をもかむがへ出させて萬葉のむねをとはせられも考させもし給はんにかくばかりの誤りあるべきかはそれのみならず人していく度も上下よみとゝのへさせらるべきことなるを有とある人みな既に入し歌をおぼゆるほどの人なからんやは公任卿はたこゝのふるき事しれる人とはなけれど時につけて名もたかく家もよろしくまづしき事なども聞えぬをさばかりよみかへし古きふみをくらべなどするばかりの人なからんやこれらをおもふに御撰はもとよりにて公任卿の集めにもあらずかたへにこもりをるものゝさるべき從者だにもなく又よき友だにもあらぬわび人のみづから書集めしものにてかへりみだにせで傳りし成べしさて歌をみるに勝れたるいさゝか有て大かたの撰に入べきはなかばゞかりも有ぬべしその外はことにのぞみてこゝろもとなくいひつゞけたるもの多く歌ことばともなきのみ

拾遺集にはかへりてよき歌ありされど萬葉のうたをとり出たるが多くはよみ誤りたりこは古今にすら後撰にも誤れりよりて萬葉に入たる歌の此三集にとりたるは萬葉にみよその外には此集にもよきはぬきでたり

後拾遺歌集にいたりてはいとくだりて論なし中に一つ二つはとるべきもあれどいとまなければおきぬ堀川の院御百首の時は歌のいにしへにかへらんとせしも有てたまたまはさも有べくみゆる有を却て一つ二つとり出たりをしきかなこの頃心は高けれどふるきふみ古きうたをよくとき得て論ひ定めたる人なき故かおのづからながれていとのちのすがたになりぬその〻ちの歌どもにもたま〳〵はさるべきも有どさのみはいとまもなくておきぬたゞかまくらの右まうち君のはよにすぐれて直ちに萬葉につぐべしその集の中にておほくとり出たり

此卷々よりとり出たる歌ども別に草稿し侍りされど已もたる卷々に朱もて記しつけ置心有る人み給ふべし

寶曆壬午のとし縣居草稿

右卷には眞淵自筆草稿本の文字のさま其まゝうつしぬ

三代集總說終

明治三十六年九月十日印刷
明治三十六年九月十五日發行

（賀茂眞淵全集第一）

編輯者　國學院編輯部
校訂者　賀茂百樹
發行者　吉川半七　東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地
印刷者　野村宗十郎　東京市京橋區築地參丁目拾五番地
發行所　弘文館　東京市京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

著作權所有

株式會社東京築地活版製造所印刷

Ⓜ